

さて、早速だが少し訊きたい。

『姉』とは、何か。

甘やかしてくれる姉、厳しい姉、ほんわかした姉……様々なキャラが付与されても、彼女たちは確かに『姉』としての責任を果たしている。

姉としての責任——それは、弟または妹に対する年上としての威厳の提示。

それをなしてこそ、姉は姉たりうるものだと、俺は思う。

「うわあああああん!!! 春（はる）うー!!!」

ゆえに俺は決して認めない。

「わ、わわわたしの制服どこ!? 遅れちゃうよおおお!!!」

たとえ、現在進行形で赤子のように喚く少女が『姉』だとしても、俺は決して彼女を姉とは認めない。

「春うううう! 死んだ目してないで助けてえ……私生徒会長になったんだよお、挨拶しないといけないんだよ……春う」

俺は朝食の箸を止め、窓から見える桜景色に視線を移した。

（あずき……まだ寝てるだろうな）

今日——四月六日。

この日は姉の始業日であると同時に、俺——高峰（たかみね）春斗（はると）の都立朝葉高等学校への入学の日でもあった。

時刻は七時三十分。高校から発表された集合時間までまだかなりの余裕がある。俺はつらい受験戦争を終えた感慨に浸りながら味噌汁をすする。

うん、我ながらいい出来だ。

ただ少し塩っ気が強い。今度作るときはうま味の出汁を見直すとしよう。

「は・る・う!!!!!!」

「うわあ、びっくりした」

急に耳元で大声を出されるとさすがに驚く。俺は淡白な反応と共に『姉（仮）』——高峰（たかみね）桃乃（ももの）へと向き直った。

「お姉ちゃんのことを無視するなんて……! それでも弟ですかあ!」

セリフだけ聞けば短気系お姉ちゃんなのはと錯覚してしまいそうだが、彼女の身長を見やるや全員が口を揃えてこう言うだろう。

——自分のことを姉と勘違いしている痛い妹、と。

少女、高峰桃乃は間違いなく美少女である。

母さんが外人で、さらに元ハリウッド女優というのもありその血を強く引いているのだろう。芸術作品のようにさらりと流れる金髪に青く澄んだ目、一目見れば数舜動けなくなるほどの美貌の持ち主だ。

だが、現実はそう上手く作られていない。

彼女の身長は百四十五センチ。言ってしまうえば日本人女性の十二歳平均身長以下なのだ。だからこそ、こうやってぶんすか頬を膨らまし怒っている姿もどこか可笑しく感じてしまう。

「制服なら姉さんの部屋にあるんじゃないのか？」

「探したよー！ でもなかったの！ お願い春う、お姉ちゃんを助けてえ」

「……………」

姉は年上として、弟たる俺を導く存在であるはず……そのはずだ。

だが現実には、だらしのない姉が弟に頼りっぱなしになっている残念な姿。

こんなのは、姉とは言わない！

漫画のように涙を流す桃乃の頭を撫でる。「ふみゃ〜」と猫なで声を出すのが、すぐに思い直し「って違うよお！」と尻尾を怒らせた。

「言っても、制服が逃げるわけないんだから、家のどっかにあるだろ」

「それが探してもないんだよお！ こうなったらもう盗まれた線を考えるしか……………はー！」

桃乃は言いながら何かを察したのか、両腕を抱き、侮蔑の視線を向けてきた。

「春……まさかお姉ちゃんの……………！」

「ちげえよ！？ ……まったく、盗むならもっと巨乳の子の制服を盗むわ！」

「それ普通に気持ち悪いよ」

「俺も思った。すまん冗談だ」

と、なんやかんや言いつつ朝食を済まし、俺は桃乃に引きずられるようにリビングを後にした。最初こそ襟を引っ張って無理やり動かそうとした桃乃だったが、無論百八センチ七十二キロの身体はびくともしなかった。

そうしてガチ泣きする寸前で、俺が動いたってわけだ。

「本当ないな……………」

「うう」

しかしながら、探せど探せど桃乃の制服は見つからない。

まさか本当に盗まれたのか……と思った瞬間だった。

「朝から騒がしいねえ、何やってんのさ二人とも」

「あ！ お母さん丁度よかっ——」

「——」

風呂場につながる廊下を歩いている途中で出てきたのは、我が高峰家の母——高峰アリツサ。気怠そうにドアを開けた母さんに助け舟を求めようとした桃乃が、その姿を見て絶句した。

それは俺も例外じゃない。いやいや、いやいやいや。

「お、お母さん……その恰好」

「ん？ ああ、パジャマを用意し忘れていてね、廊下に落ちていたから勝手に着させてもらったよ」

母さん……そりゃねえぜ。

なんと母さんが寝巻代わりに来ていたのは、他ならぬ桃乃の制服だったのだ。

ただサイズが合っていない（主に胸部）のか、かなり窮屈そうな印象を受けた。

そんなことを気にする素振りも見せない母さんはあくびを漏らしながらリビングへと歩いて行った。